花嫁の父

何かにつけて祝い事が華やかな時代になった。かつての戦争のころを思うと、これも平和であればこそという思いもあるが、一方では祝い事が、お祭りさわぎで終わって、消費だけが大きいという、むなしさを感じている人も多い。

農業生産額の半分の五兆円を結婚式に注ぎこむ社会に、私たちは暮している。一体どうしてこんなふうになったのだろうかと、考えてみてもいいのではないだろうか。豊かさに慣れた人々が、単純で質素な、かつての生活に再び戻ることはできないのではないか、という危機感すら抱いている人もいる。

生きているうちに、銀シャリを腹いっぱい食べてみたい、と夢みた時代の人々には、現在の華やかな結婚式・披露宴のあり方は、想像もつかなかったことだろう。

個性的になったはずのいまの若者たちも、結婚式の時だけはなぜかウソのように昔ふうになる。

「結婚式は親のためにするようなもんで、親が喜びさえすればいい。とにかくスポンサーは親だから」と見事に割り切って、なにもかも親まかせにする若者は多い。もう少しいまの時代の若者らしい結婚式のやり方が、あってもいいのではないかと思うが、なかなかお目にかかれない。

結婚式にたどりつく、いくつかの形式の積み重ねの点で、両方の在所の習慣の相違点があり、なにかと問題も多い。

都市部では万事簡略化されており、田舎ではひときわ繁雑である。

今日、都市部のホテルなどで催される結婚式での、ゴンドラで降りてくる新奇な演出や、ケーキカット、キャンドルサービス、両親への花束贈呈などといった、一見いわくありげで、単に商業ベースに乗せられているにすぎぬ形式を、いったいだれが本気で喜んでいるのであろうか。

一生に一度のことだから、親のできなかった夢をこどもにしてやりたい、など本人より親の方が派手にすることを好む例もあると聞く。

ところでめでたいはずの披露宴で、浮かない顔をしている人がいる。それはきまって花嫁の父親である。いかに豪放な性格の持主でも、わが娘を手放すのはよほどこたえるらしい。一抹の寂しさを漂わせて、末席にいる花嫁の父の姿を見ると、人間は別れるために生きているようなもんだ、という思いがしてくる。

末の娘さんの結婚を間近に控えた知人は、妙に口数が少なくなり元気が無くなった。日頃は理性的な彼が「なにかあったら別れてすぐ帰って来い。いいか！辛抱なんかするな」と言いだし、家人を当惑させているそうである。めでたい結婚式を前にして、何もかもぶちこわしてしまうような彼の言動である。

近く私はその結婚式に出席する。彼は「式場で俺の顔をジロジロ見るなよっ」と言う。なにも私だって魂を抜かれたような、無表情の花嫁の父の顔など興味が湧くはずがない。

結婚式をすませ歳月が過ぎると、娘婿と意気投合するのが大部分だが、それまでがいろいろと大変である。少々の八つ当たりはまわりが理解してやらないと、花嫁の父の心はますます揺れ動くことになるのである。

一年近くすったもんだしたはてに、やっと知人も結婚を承知したという。式が近まると何もしないくせに妙に気持が落ち着かず、日ごとに苛立っていく花嫁の父の例は数多くある。

結局、強がりを言ってるけど、娘を奪われたような気がして、いささかやけくそになっているのである。

テレビドラマでよく見るお別れ式「お父さま長いことお世話になりました」あれを娘からやられる花嫁の父は、たまったもんではあるまい。ふだん強がりを言っている奴の泣顔を見たいために、お別れ式を無理にすすめる知人もいる。

式の当日朝早く起きて、嫁ぎゆくわが娘のために、ふろをたく父、その間にみそ汁をつくる母「とうちゃんのふろと、かあちゃんのみそ汁」と言って泣きだす娘。このようなことを新聞で読んだ。私も早く起きて、朝ぶろをたいてやりたいが、残念なことにわが家には女の子はいない。私がふろをわかすのは、妻にジャンケンで負けたときぐらいである。

最近はカラオケの出番を、最大の楽しみに式場にやって来る人が多くなった。「水にきらめく、かがり火は……」と声を張り上げ歌っている人の生き返ったような表情はなかなかいいものである。盛大に拍手

をすると思い違いして、連続して歌うので私は適当に手をたたくことにしている。
マイクを渡されると、途方もない調子外れで歌う知人がいる。一度聞いたら絶対に忘れようもない、すごい歌いぶりである。多くの人が腹痛を訴え、涙を流す人さえいる。歌のうまい人がふえた時代だけに、貴重な存在である。奥さんはプロ級の歌い手だが、拍手は彼の方が断然多い。
結婚式に招待されご馳走を食べるだけの時は、気楽なものである(私は飲めない)。近頃はやりのカラオケの出番もなんとか理由をつけて辞退し、お色直しの度に拍手をするぐらいは、そう苦にはならない。
式場の花嫁はみんなしおらしく、控え目で美人である。それに当日だけかもしれないが、無口なのがなによりもいい。何年か後には、その一家の支配者になるとは当日の姿からは想像はできない。
あるホテルでの四百名近い豪華な結婚式に招待された時のことである。見事な洋食の披露宴！張り切って食べることだけを考えていた私を、驚かす事が起きた。祝辞を述べる人が極度の緊張のため、貧血をおこされたのである。知人の司会者があわてて「〇〇様がお具合が悪くなられましたので、K様にお願いいたします」とこともあろうに私を指名したのである。野球やソフトボールならわかるが、祝辞のピンチヒッターに私は一瞬息を呑んだ。この不意打ちに目の前の洋食の皿が急にかすんで見えてきた。
マイクを渡された以上、黙ってお辞儀をして引きさがるわけにもいかず、あきらめてゆっくりとはじめた。
間もなく、ひきつったような緊張感に包まれていた会場は、爆笑のあらしになり、そして又無人のような、静けさにもどった。

披露宴での新郎は、すべて前途有望な好青年であり、花嫁は才媛で、すばらしい性格の持主ときまっている。又新しい生活の門出にあたり、さまざまな人生訓らしいものが述べられるのが、一般的な祝辞である。だが私はその点には一切ふれなかった。妻は悪い趣味だと言うが、大方の予想を裏切るのは、私の数少ない得意技の一つである。「スカートとスピーチは短いほどよい」ともいうが、そうもいかない。与えられた五分間の祝辞を終えると、驚いたことに新郎と花嫁までが拍手をしているのである。いままで幾度か結婚式に出席したが、このようなことははじめてである。いいようのない感動が私を包んだ。席に着いた私は、全身の力が抜け、食欲は全くなくなりやたらに喉が渇いた。その折の食べそこなった洋食の数々が、いまでも夢に出てきて、私を残念がらせるのである。飾り雛のようにコチコチになった新郎と、ふくよかな笑みを湛えた新婦との対比が、なんとも心地よい印象を与えていたのを覚えている。

ある結婚式で花嫁の父が謝辞を述べるため、マイクの前に進んだ。日頃からスピーチが好きで、次の人の持時間までやってしまうことで定評のある人であったが、なかなか始めない。やっと「本日はお忙しいなかを」までであとは声にならず、うつむいたままである。場内はしずまりかえった。心情を察した参列者は、誰からともなく立ち上がって、万雷の拍手をこの花嫁の父へ贈った

謝辞が言えなかった花嫁の父、抱きかかえられながら席にもどるその姿は、わが娘への惜別の思いと、深い愛情を物語っていた。

その日の夜半突然電話がなった。深夜の電話はいやなものである。瞬間不安な気になった。電話は花嫁の父からで「これからもどうか娘をよろしく」それだけであった。短い言葉ではあったが、娘を思う親の

心情が伝わってきて、夜中になんと人騒がせなという思いも消えてしまった。
男性は大きなことを言っても、女性より孤独に弱い生物ではないかという気がしてならない。おじいさんはすべてが弱りつつあるのに、おばあさんはなかなかしっかり者で、地獄耳も達者だという例はよく見受ける。
女の子のいない私は、あの複雑で微妙な花嫁の父の心理を味わうことはない。長男の結婚式の折など、花嫁を迎える喜びで謝辞など全く苦にならずやってのけた。ところが二男の場合は少々勝手が違った。花嫁の実家は男の子がいなくて、頼りにしていた娘を二男が引き抜いての結婚式であった。
松江からはるばる九州は博多の地まで、可愛い娘を手放す親の心情を察した途端、私の挨拶は予定が狂い、親への同情のことばとなってしまったのである。
博多駅で両親を見送ったが「たのみます」と深々と二男に頭をさげ、目頭を熱くされているのを見て、私までじんときてしまった。
多くの人々の喜びの声の後ろに、花嫁の父の吐息を聞く思いであった。親不孝をすすめるつもりは毛頭ないが、親の真実の心がわかるのは、こどもが老境になってからではないか、という説もある。
思い起こすときりがないくらい、その時々の光景が鮮やかに浮かんでくる。結婚式を通して、今後も得るであろう、すばらしい人達との出会いを大切にしていきたい、と心から思うこの頃である。